

短大生の食に関する意識調査

—— 食浪費の一要因について ——

高橋 寿美子

I. 目的

現在の我が国は高度経済成長以来、食料事情が良くなり、多種多様の加工食品や調理済み食品が出回り、「いつでも」、「どこでも」、「何でも」、「いくらでも」、食べられる状況である。そのため経済と労働軽減要求がもたらされている。お金で買う行動が優先する現在の食文化は、家族の食生活から剝奪すべきである。消費節約は重要なことであり、かつ切実の課題である。これから社会人となる短大生について食に関する浪費をどのように考えているか、また実行しているかを知るために、次の様式にしたがって、食浪費のアンケート調査を試みた。

II. 調査方法

(1) 対象者及び回収率

本学短期大学生食物栄養科

平成3年度入学生 114名 (回収率 96.7%)

平成4年度入学生 115名 (回収率 97.5%)

(2) 実施時期

平成4年5月上旬

(3) 方法

調査内容

食浪費テストは大きくわけて、4つの領域からなりたっていると考えた。第1は経済面からの食浪費であり(問1～5)、次に第2として栄養面からの食浪費(問6～10)、第3は心理面からの食浪費(問11～15)、そして第4の管理面からの食浪費(問16～20)があげられると思う各要因の合計は20問である。

短大生に調査用紙を配布して記入させ回収した。

第1の経済面の(問1～5)までは、食べ物を買う時の考え方、食品(材料)の使い方の多少について、予算通りの献立かどうか、食生活に関しての廃物をださないか、またその利用をしているかどうかに関する問である。

次の第2の栄養面(問6～10)では栄養のバランスを常に考えているか、偏食矯正の努力があるか、美食をとるかどうか、残食(欠食)をしないか、家族の好き嫌いを直す努力をしているかなどの問である。

表1 食浪費テストの要約

経済面	1	不経済の買い方
	2	不経済の使い方
	3	予算にかなわない献立
	4	廃物を利用しない
	5	廃物を出す
栄養面	6	栄養のアンバランス
	7	偏食を矯正しない
	8	美食する
	9	残食(欠食)する
	10	家族の嗜好を無視する
心理面	11	不規則な食事時間
	12	食生活を配慮しない
	13	食の知識と技術の不足
	14	味つけ無関心
	15	食事中談話しない
管理面	16	冷蔵庫の管理無関心
	17	食品の管理無関心
	18	器具の手入れをしない
	19	食器の破損無関心
	20	光熱・給水・洗剤を節約しない

第3の心理面(問11~15)までは、食事時間が規則的に行われるか、食生活に気を使っているか、また食生活に関しての知識や技術の努力があるかどうか、味付には気配りがあるか、食事の時に談話があるかなどに関する問である。

第4の管理面(問16~20)では、冷蔵庫の整理をするかどうか、食べ物管理は、器具の手入れをするか、そして食器具の整理はどうか、光熱、給水、洗剤などの節約をしているかなどの問である。上記のことを更に要約しまとめたものが表1 食浪費テストの要約に示したものである。

食浪費指数の算出法

(1) 食浪費因子テストの指数算出法を用いて算出した。

1. 各問の応答 a, b, cのうち、応答 a に○印をいくつつけたかを数え、その数を記入する。…………… () (1)
2. 次に応答 b に○印をいくつつけたかを数え、その数を記入する。…………… () (2)
3. (1)の数と(2)の数を、次の式にあてはめて計算する。

$$\frac{(1)の数 + \frac{(2)の数}{2}}{10} \times 100 = \text{食浪費指数}$$

食浪費指数は、0から200にわたり、その段階は、表3に示した通りである。これは5つの段階にわけ、0に近いほど食浪費が僅少であり、200に近いほど食浪費が過剰であることが示している。

表2 食浪費テスト

記入上の注意：つぎに問題が20問ございます。よく読んでつぎの各問の答え a, b, c のうちから1つを選び○印をつけて下さい。

問	答
1 食べ物を買うときには、経済面のことを、よく考えてするようにしています。	a いつも不経済の買い方をしている b ときに不経済の買い方をする c いつも経済的にものを買うようにしている
2 食品(材料)の使い方がいつも多すぎて、不経済のことはありませんか	a いつも不経済の使い方をしている b ときに不経済の使い方をする。 c 使い方を加減し経済的にしている
3 献立はあらかじめ予算にもとづいて、たてるようにしていますか	a いつもそのとき、その場でたてることが多い b ときには、前もってたてる c いつも前もって、予算にもとづいてたてる
4 食生活に関しては、どんな廃物でも、よく利用していますか	a 廃物の利用はほとんどしない b ときに、廃物の利用をする c いつも廃物の利用をしている
5 食生活に関しては、廃物をださぬように努力していますか	a 廃物をだすことが多い b ときにだすことがある c いつも廃物をださぬようにしている
6 栄養のバランスをつねに考え、材料をえらび、むだのないようにいろいろ組合せることにつとめていますか	a ほとんど栄養のバランスのことは考えない b ときにする c いつも栄養のバランスのことを考え、実行している
7 偏食をなおそうと、いつも努力していますか	a ほとんど、努力していない b ときにすることがある c いつも努力している
8 美食をとることが多いですか	a とることが多い b ときにすることがある c とらぬよう努力している
9 残食(欠食)をしないように努力していますか	a 残食(欠食)することが多い b ときにすることがある c 残食(欠食)をしないように努力している
10 家族の食べ物の好き嫌いをなおすように努力していますか	a ほとんどしない b ときにする c いつも努力、工夫している
11 お宅では、食事をいつもきまった時間(規則的)にしていますか	a まったく不規則である b 不規則のことがある c いつもきまった時間に
12 食生活には、あまり気をつかわずにきままにしていますか	a つい、気をつかわないでしまう b ときに気をつかう c とくによく気をつかっている
13 余暇をみつけて、食生活についての知識や技術を身につけようと努力していますか	a ほとんどしないし、できない b ときにする c いつも実行している
14 味つけ(塩味や甘味)については、いつも気を配り努力していますか	a まったく、気をつかわずにとっている b ときに注意することがある c いつも気を配りとりすぎないようにしている
15 食事のとき、談話をしながらとりますか	a ほとんど談話をしない b 談話することがすくない c いつも談話しながら食事を
16 冷蔵庫の管理(掃除、残品しらべなど)をよくいたしますか	a いつも忘れたころにする b ときにする c いつも管理を良くしている
17 食べ物の管理について、理解し、いつも努力していますか	a ほとんど努力していない b ときにする c いつも管理することに努力している
18 スプーン、刃物、その他の器具などの手入れをいつもしていますか	a ほとんどしていない b ときにしている c いつも手入れをしている
19 食器の古くなったものや破損したものの管理に気をつけていますか	a ついすっかりしている b ときに注意している c いつも気をつけとりかえている
20 光熱、給水や洗剤などを節約して使っていますか	a つっかりして、節約しないことが多い b ときに節約する c いつも節約して使っている

表4 短大生の食浪費指数度数分布表

	平成3年度入学生		平成4年度入学生		全 体	
	人数 人	割合 %	人数 人	割合 %	人数 人	割合 %
0～30	1	0.88	1	0.87	2	0.87
31～40	3	2.63	2	1.74	5	2.18
41～50	8	7.02	7	6.09	15	6.55
51～60	9	7.89	16	13.92	25	10.92
61～70	13	11.40	16	13.92	29	12.66
71～80	11	9.65	16	13.92	27	11.79
81～90	16	14.04	18	15.65	34	14.85
91～100	23	20.18	14	12.17	37	16.16
101～110	12	10.53	8	6.96	20	8.73
111～120	9	7.89	10	8.67	19	8.30
121～130	2	1.75	4	3.48	6	2.62
131～140	3	2.63	1	0.87	4	1.75
141～150	1	0.88	1	0.87	2	0.87
151～160	3	2.63	0	0	3	1.31
161～170	0	0	0	0	0	0
171～180	0	0	1	0.87	1	0.44
181～190	0	0	0	0	0	0
191～200	0	0	0	0	0	0
合計	114	100	115	100	229	100

表3 食浪費指数の段階

浪費指数	段 階	
0～40	1度	僅 少
41～80	2度	少 ない
81～120	3度	多 い
121～160	4度	過 多
161～200	5度	過 剩

図1 短大生の食浪費指数度数分布図

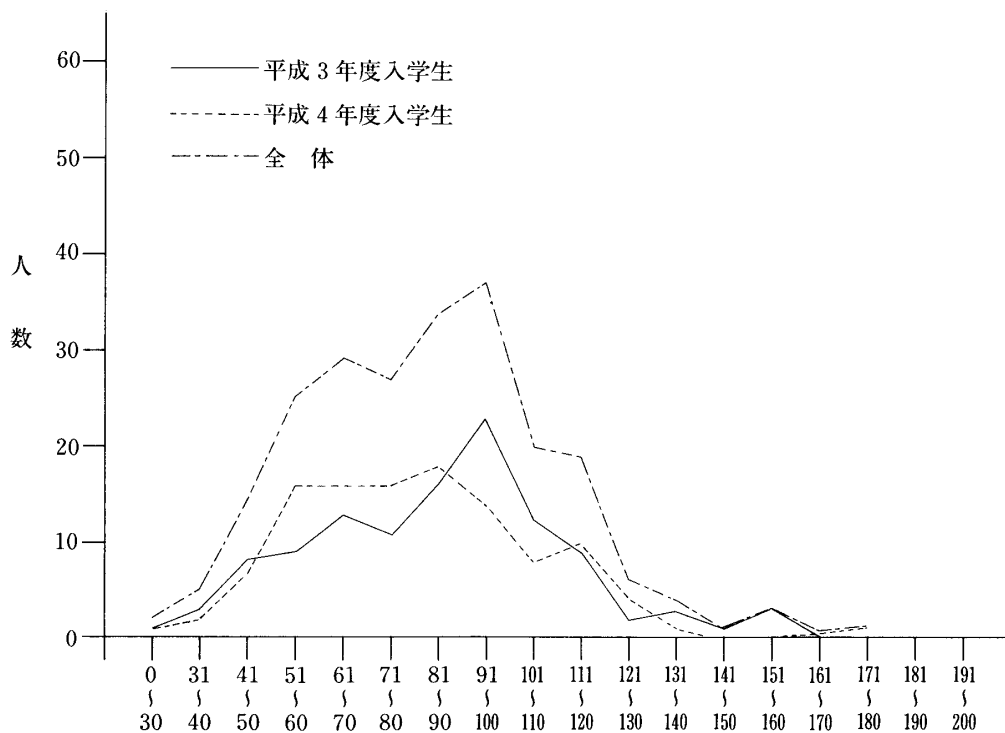
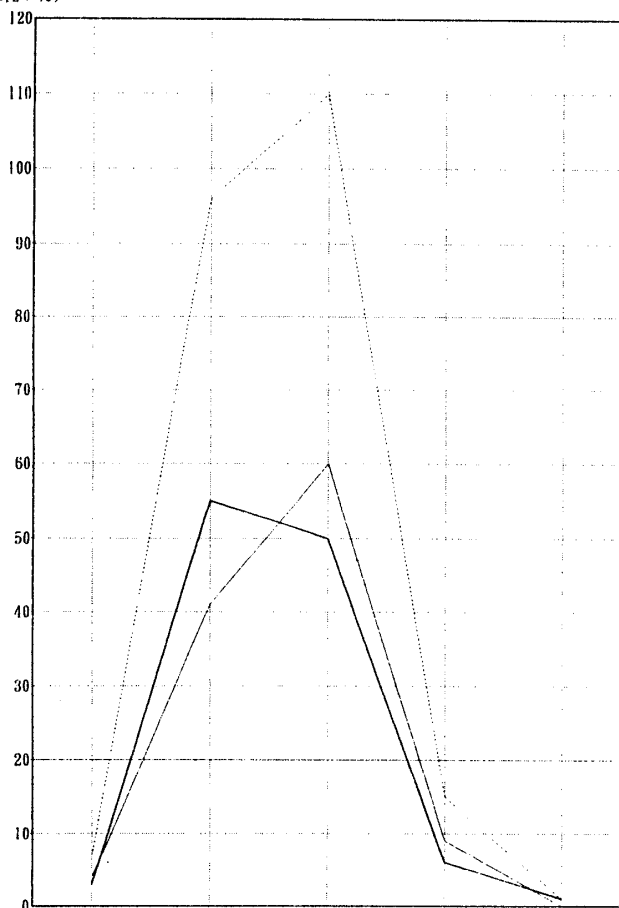


表5 食浪費指数の段階

食 浪 費 指 数			平成3年度入学生		平成4年度入学生		全 体	
			人 数	割 合 %	人 数	割 合 %	人 数	割 合 %
0~40	1 度	僅少	4	3.51	3	2.61	7	3.06
41~80	2 度	少ない	41	35.96	55	47.82	96	41.92
81~120	3 度	多い	60	52.63	50	43.48	110	48.03
121~160	4 度	過多	9	7.90	6	5.22	15	6.55
161~200	5 度	過剰	0	0	1	0.87	1	0.44
			114人	100%	115人	100%	229人	100%

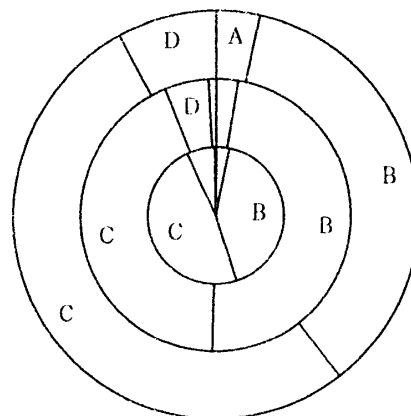
(単位:40)



	0~40	31~80	81~120	121~160	161~200
平成3年度	4	41	60	9	0
平成4年度	3	55	50	6	1
全体	7	96	110	15	1

図2 短大生の食浪費指数分布図

図3 短大生の食浪費指数の段階図



(単位:台)

	平成3年度	%	平成4年度	%	全 体	%
A-1度	4	3.5	3	2.6	7	3.1
B-2度	41	36.0	55	47.8	96	41.9
C-3度	60	52.6	50	43.5	110	48.0
D-4度	9	7.9	6	5.2	15	6.6
E-5度	0	0.0	1	0.9	1	0.4
合計	114		115		229	

五段階分布図

Ⅲ. 調査結果及び考察

(1) 食浪費指数の算出法によって、算出した結果は、表4 短大生の食浪費指数度分布表と表5 短大生の食浪費指数の段階と、図1 短大生の食浪費指数度分布図、図2 短大生の食浪費指数五段階分布図、図3 短大生の食浪費指数の段階図に示した通りである。

短大生の平成3年度入学生（短大2年生）の食浪費の指数をみると一番高い指数は81~120の3度「多い」が52.63%であり、全体の5割以上を占めている。次に41~80の指数で、2度「少ない」が35.96%であり、3割6分位の数値を占める程度であった。望ましい数値の0~40の1度「僅少」は3.5%のみである。問題と考えられる121~160の4度「過多」が7.9%を占めていた。

次に平成4年度入学生（短大1年生）の食浪費指数をみると、一番高い指数は、41~80の2度「少ない」が47.82%を占め、全体の5割弱のみであった。次に81~120の3度「多い」が、43.48%であり、「少ない」と「多い」とが半々を占めていた。ただ望ましい数値の0~40の1度「僅少」は2.61%のみであった。問題とされている121から160の4度「過多」が5.22%と161~200の5度「過剰」とされているものが0.87%であり、合わせて6.07%も示める数値であった。

ただ、平成3年度入学生よりも、平成4年度入学生の方が、41~80の2度「少ない」指数が11.86%の高い値を占めしていることもわかった。

平成3年度入学生と平成4年度入学生を合わせて全体的にみると、81~120 3度「多い」が、48.03%を占め、約5割を占める結果であった。次に41~80の2度「少ない」が41.92%で4割位であった。問題点とされている指数121~160の4度「過多」が6.55%と161から200の5度「過剰」が0.44%を占め合わせて6.99%を占めていることがわかった。それに0~40、1度「僅少」の指数が3.06%のみであり、食物専門学生としてみると問題点が指摘されると思う。

更に短大生の食浪費テストを分析してみるこ

表6-1)

短大生の食浪費テスト分析表（平成3年度入学生）

	理由	平成3年度入学生 N=114					
		a		b		c	
		食浪費がある	%	食浪費が時にある	%	食浪費が少ない	%
経済面	1 不経済な買い方	6	5.3	62	54.4	46	40.4
	2 不経済な使い方	4	3.5	84	73.7	26	22.8
	3 予算にかなわない献立	41	36.0	59	51.8	14	12.3
	4 廃物を利用しない	32	28.1	76	66.7	6	5.3
	5 廃物を出す	19	16.7	70	61.4	25	21.9
栄養面	6 栄養のアンバランス	7	6.1	81	71.1	26	22.8
	7 偏食を矯正しない	24	21.1	47	41.2	43	37.7
	8 美食する	15	13.2	88	77.2	11	9.6
	9 残食(欠食)する	12	10.5	37	32.5	65	57.0
	10 家族の嗜好を無視する	32	28.1	55	48.2	27	23.7
心理面	11 不規則な食事時間	18	15.8	49	43.0	47	41.2
	12 食生活を配慮しない	16	14.0	67	58.8	31	27.2
	13 食の知識と技術の不足	19	16.7	89	78.1	6	5.3
	14 味付け無関心	5	4.4	46	40.4	63	55.3
	15 食中談話しない	19	16.7	27	23.7	68	59.6
管理面	16 冷蔵庫の管理不備	26	22.8	62	54.4	26	22.8
	17 食品の管理無関心	13	11.4	74	64.9	27	23.7
	18 器具の手入れ	20	17.5	77	67.5	17	14.9
	19 器具の破損無関心	21	18.4	54	47.4	39	34.2
	20 光熱・給水・洗剤を節約しない	24	21.1	65	57.0	25	21.9

表6-2)

短大生の食浪費テスト分析表（平成4年度入学生）

	理由	平成4年度入学生 N=115					
		a		b		c	
		食浪費がある	%	食浪費が時にある	%	食浪費が少ない	%
経済面	1 不経済な買い方	5	4.3	68	59.1	42	36.5
	2 不経済な使い方	2	1.7	76	66.1	37	32.2
	3 予算にかなわない献立	55	47.8	48	41.7	12	10.4
	4 廃物を利用しない	52	45.2	58	50.4	5	4.3
	5 廃物を出す	15	13.0	79	68.7	21	18.3
栄養面	6 栄養のアンバランス	3	2.6	75	65.2	37	32.2
	7 偏食を矯正しない	12	10.4	57	49.6	46	40.0
	8 美食する	17	14.8	82	71.3	16	13.9
	9 残食(欠食)する	6	5.2	34	29.6	75	65.2
	10 家族の嗜好を無視する	35	30.4	61	53.0	19	16.5
心理面	11 不規則な食事時間	12	10.4	62	53.9	41	35.7
	12 食生活を配慮しない	9	7.8	71	61.7	35	30.4
	13 食の知識と技術の不足	8	7.0	91	79.1	16	13.9
	14 味付け無関心	3	2.6	54	47.0	58	50.4
	15 食中談話しない	12	10.4	30	26.1	73	63.5
管理面	16 冷蔵庫の管理不備	18	15.7	71	61.7	26	22.6
	17 食品の管理無関心	8	7.0	69	60.0	38	33.0
	18 器具の手入れ	15	13.0	70	60.9	30	26.1
	19 器具の破損無関心	15	13.0	47	40.9	53	46.1
	20 光熱・給水・洗剤を節約しない	17	14.8	59	51.3	39	33.9

とにした。

(2) 食浪費テストの解答されたa, b, cの数値を次のように分析した。解答aを「食浪費がある」とし, bを「食浪費が時にある」とし, cを「食浪費がない」とした。

その結果をみると, 短大生の食浪費テストとし平成3年度入学生を 表6-1(1)で示し, 平成4年度入学生を 表6-1(2)で示した通りである。

まず平成3年度入学生の食浪費テスト分析表を見ると, 4段階にわたった内の第1経済面(問1~5)においては, 1.「不経済な買い方」では, bの「食浪費が時にある」が54.4%とcの「食浪費がない」が40.4%であり, 約半々状態であった。次に2, 「不経済な使い方」は, 「時にある」が73.7%と高い数値を占めている。3. 「予算にかなわない献立」は食浪費が「時にある」が51.8%であるが, しかし問題点とされている, aの「ある」が36.0%を示していた。4. 「廃物を利用しない」では「時にある」が66.7%であるが, 「ある」が28.1%で少なくないが示された。

次に第2の栄養面(問6~10)においては, 6 「栄養のアンバランス」はbの食浪費が「時にある」が71.1%とcの食浪費が「ない」が22.8%でもあり, 良い傾向である。7. 「偏食を矯正しない」においては「時にある」41.2%と「ない」が37.7%であり, 「ある」も21.1%とバラツキがある。8. 「美食する」においては「時にある」が77.2%であった。9. 残食(欠食)するにおいては「ない」が57.0%と「時にある」が32.5%で大変よい状態である。10. 「家族の嗜好を無視する」においては「時にある」が48.2%で「ある」が28.1%と「ない」が23.7%を示していた。

第3の心理面(問11~15)においては, 11. 「不規則な食事時間」は「時にある」が43.0%と「ない」が41.2%と半々を占めている。12. 「食生活を配慮しない」は「時にある」が58.8%と「ない」が27.2%よい傾向にある。13. 「食の知識と技術の不足」においては, 「時にある」が78.1%を示していた。14. 「味付け無関心」では, cの「ない」に55.

3%を占め, bの「時にある」には40.4%を占めて味付けには関心があることが示された。15. 「食事中に談話しない」ことが, cの「ない」59.6%を占め, bの「時にある」が23.7%となり, 合わせると約8割が会話しながら食事が行われていた。第4の管理面(問16~20)においては, 16. 「冷蔵庫の管理不備」がbの食浪費が「時にある」に54.4%を占め, aの「ある」とcの「ない」とがその半々を占めていた。「ある」が22.8%とを占めることは少々問題があると考えられる。次に17. 「食器の管理無関心」では, bの食浪費「時にある」が64.9%であり, cの「ない」が23.7%であった。しかし, 食品の管理についてももう少し関心があってもよいと思われる。18. 「器具の手入れ」については, この「時にある」が67.5%であるが, cの「ない」が14.9%と少なくない。19. 「器具の破損無関心」ではbの食浪費が「時にある」が47.4%とcの「ない」が34.2%と関心が高い傾向にあることもわかった。20. 「光熱・給水・洗剤を節約しない」においては, bの食浪費が「時にある」が57.0%であり, cの「ない」が21.9%とaの「ある」が21.1%と同じ数値を占めていた。aの食浪費があるが高いのは望ましくない。

続いて 表6-1(2) 平成4年度入学生の食浪費テスト分析表を見ると, まず第1の経済面(問1~5)においては, 1, 「不経済な買い方」は, bの食浪費が「時にある」が59.1%とcの食浪費が「ない」が36.5%と平成3年度入学生と同じ傾向である。第2の「不経済な使い方」はbの「時にある」が66.1%とcの「ない」が32.2%であり, 問1と同じであった。3. 「予算にかなわない献立」では, aの「ある」が47.8%であり高い数値を占めておることが問題点であると思う。ただbの「時にある」も41.7%を占めているが, cの「ない」が10.4%と1割であり, 予算と献立の難しさが示された。4. 「廃物を利用しない」では, bの「時にある」が50.4%と, aの「ある」が45.2%とも占めており, 問題点が感じられる。5. 「廃物を出す」ではbの「時にある」が68.7%があり, cの「ない」

が18.3%と少なくない値を占めている状態である。第2の栄養面(問6~10)においては、6.「栄養のアンバランス」、bの「時にある」が65.2%とcの「ない」の32.2%であり、平成3年度入学生と同じ傾向にある。7.「偏食を矯正しない」でもbの「時にある」49.6%とcが「ない」が40.0%とである。しかし、偏食があるが1割を占めている。8.「美食する」はbの71.3%であった。9.「残食(欠食)する」ではcの「ない」が65.2%の高い数値を占めており、bの「時にある」が29.6%を占めて、平成3年度入学生と同じように大変よい傾向にある。10.「家族の嗜好を無視する」がbの「時にある」が53.0%であるが、cの「ない」が16.5%であり、少なく、aの無視することが「ある」が30.4%を占めて問題があると思われる。

次に第3の心理面(問11~15)においては、11.「不規則な食事時間」はbの「時にある」53.9%とcの「ない」が35.7%を占めている。12.「食生活を配慮しない」ではbの「時にある」が61.7%とcの「ない」30.4%とよい傾向にある。13.「食の知識と技術の不足」においては、bの「時にある」が79.1%を占めていた。14.「味付け無関心」ではcの「ない」が、50.4%であり、bが「時にある」が47.0%と平成3年度入学生と同じように関心があった。15.「食事中談話しない」においては、cの「ない」が63.5%であり、bの「時にある」は26.1%という数値であり、会話をしながら食事を取っている傾向がわかった。

第4の管理面(問16~20)においては、16.「冷蔵庫の管理不備」が、bの「時にある」61.7%と高く、cの「ない」が22.6%であり、「ある」が15.7%を占め少ないが問題がある。

次に17.「食品の管理無関心」には、bの「時にある」が60.0%とcの「ない」が33.0%を占め関心が高いのは良いと思われる。18.「器具の手入れ」はbの60.9%とcの「ない」の26.1%が示されているがaの「ある」が13.0%を占めていた。19.「器具の破損無関心」では、cの「ない」が46.1%と、bの「時にある」が40.9%とで、半々

を占めしている。aの「ある」が13.0%と低く関心が高いことを示していた。

「光熱・給水・洗剤を節約しない」においては、bの「時にある」が51.3%であることをcの「ない」の33.9%の合わせて8割5分位が良い状態にあり、aの「ある」が14.8%であったので問題がないといえないと思う。

このようにみると、経済面の食浪費では、予算にかなわない献立、廃物を利用しない、廃物をだすことなどが多い。栄養面の食浪費では、家族の嗜好を無視、美食する。偏食を矯正しないことなどが多い。心理面の食浪費では、食についての知識や技術の不足が多い。そして、管理的食浪費では、光熱・給水・洗剤の使いすぎなどであった。

次に、(3)食浪費を食浪費因子として、イメージ測定を行った。その結果は、表7 短大生の食浪費因子分析表と、図4 短大生の食浪費因子分布図に示した通りである。

イメージ測定法の算出法

問題1~20の項目が、経済面(問1~5)、栄養面(問6~10)、心理面(問11~15)、管理面(問16~20)となっている。その応答のa, b, cを点数に分けて行った。「a」は6点として、「食浪費が多い」とし、「b」は4点として「食浪費が時にある」とし、「c」が2点として「食浪費が少ない」2点として3段階にわけた。「c」の値が一番、良好であることを示している。それを平均値と標準偏差に算出した。また平成3年度入学生と平成4年度入学生と間に有意水準5%の検定を行った。

表7 短大生の食浪費因子分析表と、図4 短大生の食浪費因子分布図をみると、まず経済面(問1~5)においては、1.「不経済な買い方」では、平成3年度入学生(以後平成3年度とする)が平均値3.30%であり、平成4年度入学生(以後平成4年とする)では3.36%で両者に差がなく、食浪費が少なくない方の傾向にある。2.「不経済な使い方」では平成3年度3.61%であり、平成4年度は3.39%であり、差は0.22%で平成3年度の方が少々食浪費が高い。3.「予算にかなわない献立」については、

平成3年度は4.49%であり、平成4年度が4.75%であって、全体的にみて多く望ましくない方向である。平成4年度の方が0.26%高い。4.「廃棄を利用しない献立」においては、平成3年度は4.46%であり、平成4年度は4.75%であって、平成4年度の方が0.36%高い。この状態は3.「予算にかなわない献立」と全く同じ傾向である。5.「廃棄を出す」においては、平成3年度では4.14%であり、平成4年度は3.90%であって、平成3年度の方が0.24%食浪費が高く問題点を感じられる。有意水準5%の検定において、4.「廃棄を利用しない献立」に有意差が認められた。

次に栄養面(問6~10)においては、6.「栄養のアンバランス」は平成3年度3.67%であり、平成4年度3.41%であり、平成3年度の方が0.

21%食浪費が多い。7.「偏食を矯正しない」では平成3年度が3.67%で、平成4年度は3.43%で平成3年度の方が0.24%が多く、4点の食浪費が時にあるに近い。8.「美食する」では平成3年度4.07%であり、平成4年度は4.02%で両者の差は僅少であり、食浪費が時にあるに適応する。9.「残食(欠食)する」においては平成3年度3.07%であり、平成4年度は2.80%であり差は平成3年度の方が0.27%多くなっている。10.「家族の嗜好を無視する」では平成3年度は4.09%あり、平成4年度では4.28%であり、平成4年度の方が0.19%高いが両方共に食浪費が時にある状態であった。6.「栄養のアンバランス」において、有意水準5%の検定に有意差が認められた。

第3の心理面(問11~15)においては、11.

「不規則な食事時間」では平成3年度3.49%、平成4年度3.50%で両者の差はなく、4点の食浪費が時にあるの状態におかれている。12.「食生活を配慮しない」では、平成3年度で3.75%、平成4年度では3.55%を示し、差は0.20%と平成3年度が多く、食浪費が時にあるの4点に近い所を示している。13.「食の知識と技術の不足」においては、平成3年度4.23%、平成4年度は3.68%であり、差は0.37%であり平成3年度の方が食浪費が多いことを示している。このことは学習が進むと共に自己判断が出来ることと関係があるのではないかと考えた。14.「味付け無関心」においては、平成3年度2.98%、平成4年度3.04%と

表7 短大生の食浪費因子分析表

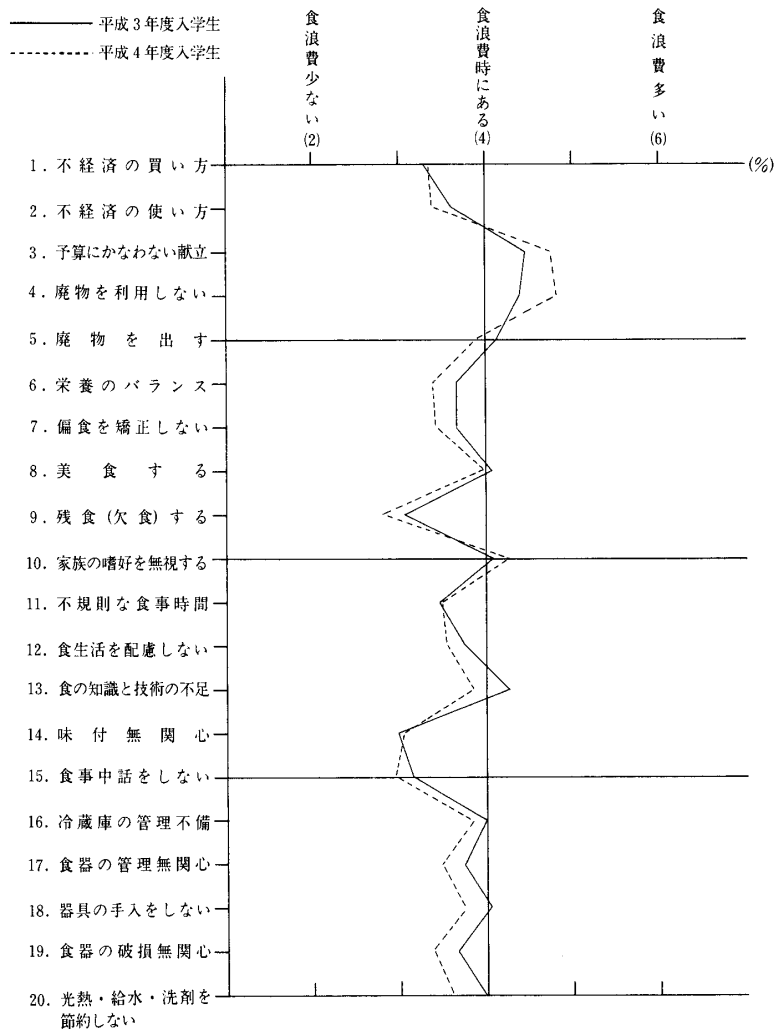
項 目		平成3年度入学生		平成4年度入学生	
		平均値 %	標準偏差	平均値 %	標準偏差
経済的	1 不経済な買い方	3.30	1.15	3.36	1.10
	2 不経済な使い方	3.61	0.95	3.39	0.99
	3 予算にかなわない献立	4.49	1.31	4.75	1.33
	4 廃棄を利用しない献立	※4.46	1.06	4.82	1.11
	5 廃棄を出す	4.14	1.23	3.90	1.11
栄養的	6 栄養のアンバランス	※3.67	1.02	3.41	1.02
	7 偏食を矯正しない	3.67	1.50	3.43	1.29
	8 美食する	4.07	0.95	4.02	1.07
	9 残食(欠食)する	3.07	1.36	2.80	1.17
	10 家族の嗜好を無視する	4.09	1.44	4.28	1.34
心理的	11 不規則な食事時間	3.49	1.42	3.50	1.26
	12 食生活を配慮しない	3.75	1.25	3.55	1.15
	13 食知識と技術の不足	※4.23	0.91	3.86	0.90
	14 味つき無関心	2.98	1.16	3.04	1.10
	15 食事中談話しない	3.14	1.52	2.96	1.35
管理的	16 冷蔵庫の管理不備	4.00	1.35	3.86	1.23
	17 食品の管理関心	3.75	1.165	3.50	1.14
	18 器具の手入れをしない	4.05	1.14	3.74	1.22
	19 食器具の破損無関心	3.68	1.42	3.34	1.39
	20 光熱・給水・洗剤を節約しない	※3.98	1.31	3.60	1.32
		N=114		N=115	

※有意義

比較的、食浪費が少ないの方向に近い状態であり、差も0.06%と少なく、良い傾向にある。15.「食事中談話しない」では、平成3年度が3.14%、平成4年度2.96%と差が0.18%ではあるが、両者共々に2点の食浪費が少ない方向に近くなる。前記に述べた、栄養面の9.「残食(欠食)する」と全く同じく、大変に良い傾向にある。有意水準5%において、13.「食の知識と技術の不足」に有意差が認められた。

第4の管理面(問16~20)においては、16.「冷蔵庫の管理不備」では平成3年度で4.00%、平成4年度では3.86%を示し、差は0.14%である。平成3年度の方が多いが、食浪費が時にあるの4点に両者が位置している。17.「食品の管理無関心」では平成3年度3.75%、平成4年度が3.50%であり、差は0.25%で平成3年度の方が多し。18.「器具の手入れをしない」においては、平成3年度4.05%で、平成4年度は3.74%とであって、差は0.31%で平成3年度の方がやや多い数値である。16.「冷蔵庫の管理不備」と全く同じ傾向を示し、食浪費が時にあるの4点に近い。19.「食器の破損無関心」では、平成3年度が3.68%、平成4年度が3.34%と差は0.34%であり、平成3年度の方が多し。傾向として両者共々に17.「食器の管理無関心」に全く似ている状態である。20.「光熱・給水・洗剤を節約しない」においては、平成3年度では3.98%であり、平成4年度は3.60%であり、差は0.38%とで平成4年度の方が多し。両者ともに4点に近い方の食浪費が時にあるという数値を示している。平成3年度と平成4年度との有意水準

図4 短大生の食浪費因子分布図



5%の検定を行った結果は、20.「光熱・給水・洗剤を節約しない」に有意差が認められた。

IV. 要約

調査目的で前述したように、食生活の消費の在り方が、正しくとはどのようにあるべきかを知り、食生活との適応性をみつけだすために短大生を対象に行った。

その結果は1) 短大生の食浪費度数分布表と食浪費指数の段階において判定した。

まず平成3年度入学生においては、1番高い食浪指数で81~120の3度「多い」が平均52.63%であり、平成3年度入学生の半分以上を占め

ていた。次の2番目には、食浪費指数41~80の2度「少ない」が35.96%であり、全体の3分の1位が占めた。3番目として121~160の食浪費指数の4度「過多」が7.9%と全体からみて少ないが食物専攻生に含まれて居ることに問題点があると思われる。また最も望ましい食浪費指数0~40の1度「僅少」においては3.51%と非常に低い値を占めていたことが認められ、短大の1年間の学習の難しさが指摘されたように思う。次に平成4年度入学生で1番高いものとして食浪費数は41~80の2度「少ない」が平均47.82%であり、2番目は81~120の3度「多い」が43.48%であった。平成3年度との相違をみると1番目と2番目の順位が反対の状態である。ただしその差は4.34%であり少なかったが、全体4割から5割近く、それぞれが占めていた。また、食浪費がかなり高いとされている121~160の4度「過多」と161~200の5度「過剰」を合わせると6.09%であり、数量的には小さいが平成3年度入学生と同じように問題点があると思われる。最も望むとされている0~40の1度「僅少」が2.61%と少ない点においても考えられ指摘されると思う。

平成3年度入学生と平成4年度入学生の合わせて、全体をみると81~120の3度「多い」が48.03%を占めて高く、次は41~80、2度「少ない」が41.92%であった。その差は6.11%であり、全体の半々を占めていることになる。かなりの食浪費と思われる121~160の4度「過多」と161~200の5度「過剰」は全体の6.99%を占めていた。最も望ましい0~40の1度「僅少」は3.06%と非常に低い数値である。

このことから短大生、各自にそれぞれの自覚を促し、積極的に改善をするように努力することを学習を通して指導しなければと考えられた。

次に短大生の食浪費テストを段階別に分析をした。食浪費テストの解答a, b, cの数を調べて分析してみたのである。その結果平成3年度入学生においては、まず第1経済面(問1~5)では、aの「食浪費がある」においての問題点として、3.「予算にかなわない献立」と

4.「廃物を利用しない」などが約3割を示していた。bの「食浪費が時にある」では全体の5割以上から7割以上を占めている。cの「食浪費が少ない」と最も望まれているものは、1.

「不経済な使い方」においてであり、4割以上を占めていた。次には、2.「不経済な使い方」と5.「廃物を出す」が2割くらいで、その他の項目においては1割からそれ以下であった。

第2, 栄養面(問6~10)においては、まずaの場合の「食浪費がある」は、7.「偏食を矯正しない」と10.「家族の嗜好を無視する」に2割以上が占められていた。bの「食浪費が時にある」が全体の4割から7割以上を占めていた。望ましいcの「食浪費が少ない」では9.「残食(欠食)する」が5割以上を占めている。次には7.「偏食を矯正しない」が3割以上であり、10.「家族の嗜好を無視する」と6.「栄養のアンバランス」が2割以上を占めていた。このことからaの「食浪費がある」とcの「食浪費が少ない」とが、少ない数であり、同数を占めたことが認められる。

第3, 心理面(問11~15)においては、aの「食浪費がある」が、全面的に少なく平均して1割強くらいであり、ことに14.「味付け無関心」が4.4%と少なく、良好を示していた。cの「食浪費が少ない」においては11.「不規則な食事時間」と14.「味付け無関心」、15.「食事中談話しない」においては4割以上から6割近くまでを占めた。その他はbの「食浪費が時にある」が数多く占めている状態であった。平均してbとcが5割以上を示していた。第4の管理面(問16~20)においては、aの「食浪費がある」のが16.「冷蔵庫の管理不備」と20.「光熱・給水・洗剤を節約しない」で2割強を占めたが、その他は2割弱である。もっとも望ましいとされているcの「食浪費が少ない」が19.「器具の破損無関心」が3割強を占めた。その他は2割強であったが、18.「器具の手入れ」においてだけは1割5分のみであった。前面的にbの「食浪費が時にある」が5割から6割を占めていた。次に平成4年度入学生の分析の結果においては、まず第1の経済面(問1~5)をみると、aの

「食浪費がある」において3.「予算にかなわない献立」と4.「廃物を利用しない」とが4割5分以上の数値を占めておいた。平成3年度入学生よりは数値も高いが、全く同じ傾向である。bの「食浪費が時にある」が全般に数値が高く、4割から7割近く平均して5割7分の割合を占めていた。cの「食浪費が少ない」では1.「不経済な買い方」と2.「不経済な使い方」において3割以上であり他項目低い。このことも平成年度入学生と同じであった。第2の栄養面(問6~10)では、aの「食浪費がある」ので10.「家族の嗜好を無視する」が3割を占めた。平均数値は平成3年度入学生よりも高いが傾向は同じである。cの「食浪費が少ない」では7.「偏食を矯正しない」が4割と9.「残食(欠食)する」が6割5分を占めており、他は低くbの「食浪費が時にある」に該当する面が5割から7割を占めていた。第3の心理面(問11~15)においては、aの「食浪費がある」で11.「不規則な食事時間」と15.「食事中談話しない」が1割合占めて、他は低く望ましい状態である。またc「食浪費が少ない」においては14.「味付け無関心」と15.「食事中談話しない」にて5割から6割以上を占めていた。それから11.「不規則な食事時間」と12.「食生活を配慮しない」においても3割以上を占めており、他はbの「食浪費が時にある」で4割から8割近くであって、平均して5割以上であった。平成3年度入学生と全く同じ傾向である。第5の管理面(問16~20)においては、aの「食浪費がある」は、全般に1割5分以下であり、ことに17.「食品の管理無関心」は7.0%で低く良い状態を示していた。望ましいとされているcの「食浪費が少ない」においては、19.「器具の手入れ」が4割5分を占めた。また17.「食品の管理無関心」と20.「光熱・給水・洗剤を節約しない」が3割以上を占めており、他はbの「食浪費が時にある」が4割以上から6割を占めており、平均すると5割になる。経済面(問1~5)、栄養面(問6~10)、心理面(問11~15)、管理面(問16~20)、を通して平成3年度入学生と平成4年度入学生の数値の

上での差は多少みとめられるが、傾向とか状態における相違はない。ただ全般的に見ると学年の上の方に比較的良好な傾向である。

ここまでの調べにおいても、短大生達つまり、若い人達の心理面(問11~15)食浪費に関したことの、関心があるとか無いの状態が少しは明確になったと思う。

食浪費テストを食浪費分析した、これを更に位置づけるために、食浪費因子のイメージ測定法で分析してみた。

その結果は平成3年度入学生と平成4年度入学生において、まず第1の経済面では平均値の高いものとして両者とも、3.「予算にかなわない献立」と4.「廃棄を利用しない献立」が上げられる。それから平成3年度入学生において5.「廃棄を出す」が平成4年度入学生よりも高い数値を示していた。経済面の問題点となることは食物専攻生として考えてみると、過去現在と学習の中で常に求められ教科であり、その難しさや、苦勞などの立場において、このような結果になったと思われる。次に第2の栄養面においては平均値の高いのは8.「美食する」と10.「家族の嗜好を無視する」が平成3年度入学生と平成4年度入学生においても他の項目より高い状態である。このことは前に述べたように「いつでも」、「どこでも」、「何でも」、「いくらでも」というように、自分の好むものが食べられて個食、孤食にも通じることになると思われ、このことから家族に対して嗜好にも無関心になるのではないかと考えられた。しかし、9.「残食(欠食)する」が比較的数値が低く、良好であった。第3、心理的においての平均値の高いもので望ましくないものとしては13.「食の知識と技術の不足」と次に12.「食生活を配慮しない」とであった。このことは食生活に対して気を使わず、余暇をみつけて知識や技術を身につけるようには、学校以外に特別に行っていないことの表われではないかと考えてみた。ただ14.「味つき無関心」においては平均値が低く、充分に関心を持っていることが認められた。また、15.「食事中談話しない」においても従来、色々の

形で調べた時より、今回は数値として低く良い傾向を示している。このことは、社会の現状から考えてみて、今日家族が集まる所は食事の時と考えられ、そこが中心となるように、短大生自身は勿論のことではあると思うが、家族の人の意識の持ち方にもあるように思う。

次に第4の管理面においては、平均値の高いものとして、両者共々では16.「冷蔵庫の管理不備」と18.「器具の手入れをしない」が比較的高く、問題点がある。このことから日常生活において常に心掛けて行うべきである。冷蔵庫の掃除や残品のくふう利用など、また器具の手入れを行うことである。しかしこのことを行うためには、ある意味で手間暇を要することであったり、面倒さがあったり、つまり努力の不足の顕れあるとも推察される。

短大生の平成3年度入学生と平成4年度入学生との学年の相違は、全て大差は認められなかった。ただ平成4年度入学生の方に少々づつ問題が各項目に示していた。これは学習によって

意識行動の違いがあると思われる。今後学生に対して、まず食浪費因子の亢進的なところを認め、不振的なところについて自覚を促し、意識行動を高めるように、学習指導内容の充実を計るよう努力が必要と思われた。

参考文献

- 1) 石川栄助, 石川明彦; 栄養統計学綱要, 楳書店, 1985
- 2) 松村功雄; 栄養の心理—栄養教育の一指針, 三共出版株式会社, 1988
- 3) 大里進子, 若原延子, 和田幸枝編; 演習栄養指導第2版, 医歯薬出版株式会社
- 4) 高橋寿美子; 高齢者と短大生の食に関する意識調査, 食欲の一要因について, 盛岡大学短期大学部紀要第1巻(通巻第14号) p.95~103, 1991
- 5) 高橋寿美子; 短大生の意識調査, 嗜好の一要因について, 盛岡大学短期大学部紀要第2巻(通巻第15号) p.23~41, 1992